

## 第2回 国際日本学コンソーシアム

古瀬奈津子・森山新・小風秀雅

日 時	2007年12月17日(月)・18日(火)・19日(水)
場 所	お茶の水女子大学 (〒112-8610 東京都文京区大塚2-2-1) 17日 人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室(607号室) 18日 本館1階 生活科学部会議室(103号室) 19日 午前：人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室(607号室) 午後：理学部3号館7階 701号室
テーマ	日本学研究的現在と未来：国際的・学際的なネットワークの構築と活用
参加校	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 SOAS (英国)、国立台湾大学 (台湾)、カレル大学 (チェコ)、 淑明女子大学 (韓国)、同徳女子大学 (韓国)、北京外国語大学北京日本学研究中心 (中国)、 パデュー大学 (米国)、お茶の水女子大学 (日本)
主 催	お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム、女性リーダー育成プログラム (人社系)、 比較日本学研究センター

<b>12月17日(月) 第1日目</b>	
10:00 - 11:30	<b>開会式</b> 国際日本学コンソーシアムについて 森山新 (お茶の水女子大学) 大学院教育改革支援プログラムについて 古瀬奈津子 (お茶の水女子大学) 連絡事項 山須三津枝 (お茶の水女子大学)
13:00 - 15:30	<b>第1分科 (日本語学・日本語教育学)</b> 司会：高崎みどり (お茶の水女子大学) 講演： 「日中韓同形語の多義ネットワークの試案」 趙順文 (台湾大学) 研究発表： 「日本語と英語における疑問文の形式と機能の対照」 金杉ベトラ (カレル大学大学院生) 「随伴現象を表す類義表現の分析：「につれて」「にしたがって」「にともなって」をめぐって」 呉宜静 (台湾大学大学院生) 「中世期言語資料における接続詞『サテ』の様相について」 百瀬みのり (お茶の水女子大学大学院生)
15:50 - 17:50	<b>第2分科 (日本文学・日本文化)</b> 司会：小風秀雅 (お茶の水女子大学) 講演： 「近世神道史の一齣：天台宗、延暦寺と日吉社について」 ジョン・ブリー (ロンドン大学 SOAS) 研究発表： 「明治憲法の作成と伊藤博文」 李洋 (お茶の水女子大学大学院生) 「空海における神仏習合思想」 熊本幸子 (お茶の水女子大学大学院生)
18:00 - 20:00	<b>歓迎レセプション</b> (茗溪会館)

<b>12月18日(火) 第2日目</b>	
09:00 - 11:55	<b>第2分科(日本文学・日本文化)</b> 菅聡子(お茶の水女子大学) 講演: 「あいまいな都市—梶井基次郎の作品における自己と他者」 スティブン・ドッド(ロンドン大学 SOAS) 研究発表: 「三島由紀夫の身の上相談:三島の小説と女性誌との相関性」 ダンカン・アダム(ロンドン大学 SOAS 大学院生) 「大正期下層民と女性をめぐる<本能>の言説:『カインの末裔(1917)』と『或る女(1919)』を中心に」 李承京(淑明女子大学大学院生) 「『植民地』文学におけるジェンダーの考察への試み:安西冬衛の散文詩『軍艦茉莉を中心に』」 劉靈均(台湾大学大学院生) 「『羅生門』にみるジェロントフォビア(gerontophobia)の系譜」 倉田容子(お茶の水女子大学大学院生)
13:20 - 18:25	<b>第1分科(日本語学・日本語教育学)</b> 司会:森山新(お茶の水女子大学) 講演: 「映画を利用した日本語教育」 尹福姫(同徳女子大学) 「中・日対照研究と日本語教育」 徐一平(北京外国語大学) 「内容中心教授法による日本語習得」 ウェイ諸石万里子(パデュー大学) 研究発表: 「日本語の会話能力スタンダード作りの必要性:中級の問題を中心に」 梁爽(北京日本学研究中心大学院生) 「笑いに関する日中対照研究:語用論と認知言語学の接点から」 栗飯原美智(同徳女子大学大学院生) 「ブログを使った言語文化教育の実践:総合活動型日本語教育をめざして」 高宮優実(パデュー大学大学院生) 「中上級日本語学習者の受益表現に対する暗示的訂正フィードバックの効果:リキャスト(言い直し)と自己訂正を促すフィードバックの比較」 菅生早千江(お茶の水女子大学大学院生)
<b>12月19日(水) 第3日目</b>	
09:00 - 11:40	<b>第2分科(日本文学・日本文化)</b> 司会:古瀬奈津子(お茶の水女子大学) 講演: 「韓国における日本史研究の新傾向」 金善民(淑明女子大学) 「『伊勢物語』と日本の美意識」 マルティン・ティララ(カレル大学) 研究発表: 「源氏物語の贈答歌における呼応関係」 松下直美(お茶の水女子大学大学院生) 「平安貴族社会における祭装束の分配と作製」 野田有紀子(お茶の水女子大学大学院生)
13:30 - 16:00	<b>パネルディスカッション</b> 司会:古瀬奈津子(お茶の水女子大学) 講演: 「日本学研究の現在と未来:国際的・学際的なネットワークの構築と活用」 森山新(お茶の水女子大学) パネルディスカッション: パネリスト:趙順文、スティブン・ドット、尹福姫、徐一平、ウェイ諸石万里子、金善民、マルティン・ティララ、ジョン・グリーン、森山新
16:00 - 17:00	<b>会議</b> (今後の交流のあり方)

今回が第2回目となる国際日本学コンソーシアムは米国のパデュー大学を新たに迎え、本学を含め8大学で行われた。また今回は本学大学院の日本学関連の既存のゼミを母体とし、そのゼミに海外から教員と研究者をお迎えした国際ジョイントゼミの形で行われた。

17日の開会式では、まずこのコンソーシアムが国際会議や国際学会とは若干性格を異にし、大学院生の教育ネットワーク構築が主たる目的であること、学際性と国際性をめざしている点などが森山から紹介された。続いて本学が採択された大学院GPについて古瀬より紹介された。

第1分科会の発表は、17日午後、18日午後で開催され、趙順文先生（台湾大学）、尹福姫先生（同徳女子大学）、徐一平先生（北京日本学研究センター）、ウェイ諸石万里子先生（パデュー大学）が講演され、カレル大学、台湾大学、同徳女子大学、北京日本学研究センター、本学の院生が自身の研究を発表した。

第2分科会の発表は、17日午後、18日午前、19日午前で開催され、ジョン・ブリーン先生（ロンドン大学SOAS）、スティブン・ドット先生（ロンドン大学SOAS）、金善民先生（淑明女子大学）、マルティン・ティララ先生（カレル大学）が講演され、ロンドン大学SOAS、淑明女子大学、台湾大学、本学の院生が自身の研究を発表した。

初日17日の夜には歓迎レセプションが行われ、本学の副学長、研究科長、コンソーシアム・大学院GP関係教員、ジョイントゼミ関係教員などが出席し、海外からの来賓を歓迎した。

最終日19日午後には全体を締めくくり、海外からの教員全員がパネリスト、古瀬が総合司会となり、「日本学研究の現在と未来：国際的・学際的なネットワーク構築と活用」というテーマでパネルディスカッションが開催された。まず、コンソーシアムをコーディネートした立場として、森山が講演と趣旨説明を行い、続いて海外の先生方から各国における日本学研究についてご報告いただいた。続いて、今後の日本学研究、及びコンソーシアムの発展のために森山より2つの提案がなされ、それについて参加者で討論が行われた。2つの提案とは、以下のようなものである。

第一に、国際日本学コンソーシアムの発展に関するもので、①参加大学をさらに拡大することで国際的ネットワークを拡大する、②両分科を融合しうるテーマ設定により学際性の質を高める、③現在海外にて行われているジョイントゼミを発展させ、コンソーシアムの海外開催の可能性を模索する、というものであった。

第二に、遠隔システムによるジョイントゼミの日常化で、①TV会議システムの利用により、公開講演会、ジョイントゼミを日常的に開催する、②まずは論文指導・審査を国際化し、ダブルディグリー、ジョイントディグリーなどへ発展させる、というものであった。

討論においては学際性の追求と専門性の質の保証をいかに両立させるかに議論が集中したが、テーマの設定により学際性は今後も追及すべきである、教員の講演は教育的見地から学際的なテーマで行い、院生の発表は学際性を追求するものでも専門性を追求するものでもよい、海外でのコンソーシアム開催は近隣の大学にも呼びかけるといった意見で合意が見られた。遠隔システムの利用については、1月に公開講演会やジョイントゼミを計画しており、可能な大学と徐々に実行に移していくことになった。

以降、第1分科については森山が、第2分科については古瀬が所感を述べる。

【文責 森山新】

### 【第1分科】

第1分科では、2日間を通じ合計で4つの講演と7つの研究発表が行われた。会場は国内外、学内外から多くの参加者が詰めかけ、一時は座席が足りず他教室から補充を余儀なくされたほどであった。

第1分科では韓国、中国、米国、チェコ、台湾からの講演・発表があり、院生は博士課程5名、修士2名であった。院生の発表では日本語学や日本語教育の教員からのコメントはもちろん、他分野の教員からのコメントや質問、先輩からのコメントなども多く、これらの内容は今後の彼らの研究に大いに参考になったと思われる。

第1分科の講演や研究発表を振り返ると、日本語学・日本語教育学のいずれにおいても、この国際日本学コンソーシアムのめざしている、「国際性」と「学際性」の追求にふさわしい講演や発表が多く見受けられた。11の講演、発表のうち、「国際性」というキーワードに合致するものが7、「学際性」というキーワードに合致するものが6といずれも過半数を上回っていた。

「国際性」について述べると、日英、日中、日中韓といった対照言語学的研究や言語類型論的研究が3（金杉、徐、

趙)、米国、中国、韓国など、海外における教員または院生の日本語教育実践に関係する研究が5 (ウェイ、徐、尹、粟飯原、高宮)であった。「学際性」については、言語と文化の関わりについて述べた研究が3 (金杉、徐、梁)、文化を取り入れた総合的日本語教育についての研究が3 (尹、ウェイ、高宮)であった。また今回の発表では認知言語学的観点から言語を分析する研究が3 (趙、徐、梁)見られたが、認知言語学は言語学理論としては文化的知識を重視しており、その意味で認知言語学的観点からの言語研究は学際性を求める本コンソーシアムの目標に合致していると言えるであろう。

次に研究手法について述べると理論重視と実証重視といったコントラストが見られた。具体的には中韓台の研究は認知言語学や関連性理論などの理論に基づく研究が多かったが、欧米日の研究ではデータに基づき実証を重視した研究が多かった。また1日目の日本語学では共時的研究と通時的研究があった。一方2日目の日本語教育学では教育重視と習得重視といったコントラストが見られた。中韓の研究では教育のあり方について述べる研究が多かったのに比べ、米日の研究では習得について述べたものが目を引いた。理論重視と実証重視、教育重視と習得重視、共時と通時とはどれも日本語学、日本語教育学研究の重要な研究アプローチであり、研究方法を異にする様々な研究が取り交わされたことは、研究の幅を広げる意味で院生には大いに参考になったと思われる。同じ研究でも国により研究方法に傾向が見られることから、国を越えての発表の場は、相互に補完し合うことが可能となったと思われる。

当初学際性を追求し、様々な研究分野を集めての研究発表は興味を引かないのではないかと懸念もあったが、3日目の意見交換では、むしろこういった学際的な場は研究の幅を広げる点で非常に有効であり、今後も続けるべきという意見が多数であった。また第1分科の教員、院生たちの多くは第2分科にも参加していた。海外においては日本文化への関心が動機づけとなって日本語を学んだり、日本語教育で日本文化を扱ったりと、日本語と日本文化とは分離することが難しく、その意味でこういった学際的な場は大いに役に立ったと思われる。

【文責 森山新】

## 【第2分科】

第2分科では、3日間にわたり3つの分科会がもたれ、講演4つ、研究発表8つが行われた。朝早くからの分科会が2つあったにもかかわらず、どの分科会も満員となり、席を増設した場合もあった。第1分科からも多くの人たちが参加したこともあり、また、一昨年度・昨年度の魅力ある大学院教育イニシアティブで行われた共同ゼミに参加した学生が知り合いになった海外の大学の教員・学生による講演・研究発表を聞きに来た例もあり、共同ゼミ・コンソーシアムによる継続的な国際教育研究の成果の表われと言えよう。

第1日目の分科会では、前近代の日本における宗教と近代日本の法制が取り上げられ、講演は英国の教員、研究発表は中国・日本の学生(博士課程1名・修士課程1名)によって行われた。第2日目の分科会では、近現代の日本文学について、講演は英国の教員、研究発表は英国・韓国・台湾・日本の学生(博士課程3名・修士課程1名)によって行われた。第3日目の分科会では、前近代の歴史と文学が扱われ、講演は韓国・チェコの教員、研究発表は日本の学生(博士課程1名)とリサーチフェローによって行われた。どの分科会も本学の専門の教員が司会を担当し、本学の他の教員や学生が多く参加して、活発な討議が繰り広げられた。どの講演・研究発表もよく準備されたもので、大変レベルが高かったという評価が聞かれた。

今回は日本文学については近現代に講演・研究発表が集中したのに対し、日本文化においては前近代の講演・研究発表が多かったのが通常とは異なった点と言える。また、日本文学については、女性やジェンダーを扱ったものが多くみられ、世界的な傾向でもあるが、本学におけるジェンダー研究の蓄積に呼応しているかのようであった。

海外の日本学は、現在日本で行われている研究とはまた違った展開をみせていることがうかがえて興味深い。たとえば、日本文学について言えば、現在日本ではあまり研究されていない梶井基次郎、有島武郎、安西冬衛などの作家が取り上げられている。また、近世神道史を対象とした講演では、明治の神仏分離の発端が近世にあったことが指摘され、『伊勢物語』に関する講演では、奈良時代と平安時代の「みやび」の違いが指摘されるなど、細かい実証主義に陥っている日本の学界ではみられない大局的な見方が示され、海外から見た「日本」という視点の有効性が感じられた。海外の日本学とは、日本において外国を対象とした研究を行っている、たとえば歴史学における西洋史のような存在なのではないだろうか。

また、海外の日本学研究者の日本に対する姿勢として、海外と日本の相違点に着目するのではなく、日本との

共通点をもって日本学にのぞんでいるという発言も印象的であった。共通点をふまえてこそ、相違点の比較の意味がいきってくるのである。

今回はアジアと欧米の日本学の違いについても考えさせられた。日本を客観的な学問対象とすることができる欧米と、戦争という歴史的背景のあるアジアにおける日本学との違いである。特に日本史についての韓国教員の講演では、戦争という歴史があるため、どうしても客観的に日本史に対することが難しい韓国の社会的事情が述べられたが、アジアにおける日本学については多かれ少なかれ同様の背景が存在すると考えられる。それをどのように乗り越えていくのが今後の課題である。

【文責 古瀬奈津子】

### 【第二分科会第一日目】

第二分科会第一日目は、日本文化に関する報告が3本行なわれた。ロンドン大学SOASの教員による近世における神道史に関する報告は、延暦寺における仏教と神道の対立が近世初期から存在していたことを指摘したもので、近代初頭における神仏分離の理解に修正を迫る内容であり、神仏習合・神仏分離に関する歴史学からのあらたなアプローチであるとともに、倫理学との学際的接点を求めるものであった。この点で、本学大学院生による第3報告の空海における神仏習合思想に関する報告と呼応するものであったため、会場の討議は中国の禅宗の無の思想や朝鮮半島における仏教受容のあり方など、東アジアにおける宗教の融合という広範な問題へと発展し、日本学ならではの論議となった。第一報告の学際的内容がこうした方向を触発したとことができ、二回目を迎えたコンソーシアムの内容的深化を示すこととなった。

また、本学への国費留学生による第二報告は本国の大学に提出する修士論文の準備報告であり、現代中国における日本の立憲制確立過程への関心の強さを示すものであった。アジアにおける歴史学的なアプローチからの日本近代への興味は、従来の明治維新への一極的集中から脱して、近年は近代化にかかわる様々な論点へと急速に多様化しており、その内容も現代政治の文脈で理解されるような一面的な対日理解でははかれない段階に達しつつあるが、本報告もそうした傾向を反映したものと見え、海外（この場合は中国）の日本研究の現状を知る上で貴重な情報を提供してくれたのであった。

日本学が学際的分野であり、日本に関する総合学であるということは、すでによく指摘されており、毎夏に開かれる本学の国際日本学シンポジウムでもよく示されているが、今回の分科会で改めて強く感じたのは、そうした学際性や総合性は、地域それぞれの歴史や文化に根ざしており、日本に対する関心の持ち方も自ずから異なっていること、それだからこそ、そうした多様な日本への関心をお互いにすり合わせ、みずからの関心や方法を検証する機会として、このコンソーシアムが非常に有効である、ということである。

世界各地域における日本学の特徴を明らかにすることは、それぞれの地域の歴史・文化的特徴を明らかにすることにもつながっており、さらには日本学を媒介として、世界の各地域がそれぞれの歴史・文化的特質（ひいては現代における対日関心のあり方）を相互に再認識する機会ともなるのである。その意味でこのコンソーシアムは、グローバルな視点を共有し、確認することができる貴重な教育的チャンスであり、主催する本学や本学の学生にとっても、得ることの非常に多いプログラムなのである。今回の分科会は、相互に報告内容が連関していたこともあって、こうした点がよく浮き彫りにされた。今後のコンソーシアムの展開のあり方に、ひとつの方向を示すものとなったように思われる。

【文責 小風秀雅】